



# 京都・東九条CANフォーラム

## ニュースレター第5号

2010年11月3日No.005

### 多文化共生活動センターを東九条に

#### この号の内容

1. 「(仮称)多文化共生活動センター」を東九条に
2. 京都・東九条 CAN フォーラム第2回総会を開催
3. シンポジウム「京都における多文化共生を進めるために」報告
4. 京都における多文化共生を進めるための提言研究会参加者募集

#### 東九条名物シリーズ ①

-べた焼き(お好み焼き)-



べた焼きになくはないあぶらかす、西日本で「あぶらかす」「いりかす」などの名称を使うときは、牛馬の大腸や小腸を原料とした保存食を指します。

かつては屠畜業に携わる者の多い被差別部落民の間で主に生産・消費されてきました。近畿地方では「さいぼし」と並ぶ部落の伝統食であり幻の食材でしたが、差別や偏見が減少するにつれ、その独特の風味が一般にもよく知られ愛好されるようになりました。

京都・東九条CANフォーラムの発足趣旨を再確認します。

1989年から行われてきた「陶化橋上流環境整備事業」や「東九条地区住環境整備事業」には巨額の公的資金が投入されました。東九条の歴史的経緯から、行政と地元住民の話し合いにより進められてきたまちづくりの目指したものは、防災対策と住環境整備、暮らしや福祉問題、人権や外国籍市民と共に生きることに配慮した幅広いものでありました。

防災対策と住環境整備面のハード面においては一定の成果がありました。その一方で、地域人口の減少、独居高齢化の進行、空き地の増加などにより、慮外にも、イメージしていたものからはかけ離れたまちの姿に変わってしまいました。その原因はまちづくりの計画がハード面に偏重されたことにあるのは明白です。今だからこそ言えることですが、行政のみならず地域社会の人々にも今日の姿を予想できる理論がありませんでした。「課題はわかっていたが解決の方法論がわからなかった」、とても言うべきでしょうか。今でも多くの課題が取り残されています。

CANフォーラムの目指すものは、「多文化共生のまちづくり」です。弱みにとられた地域の特色を強みに変える発想転換は社会資源の発掘であり、社会的に排除されてきた者の魂と精神性の発露は人的資源の発掘であり、生活のニーズをしごとづくりや社会起業に結びつける創造性です。まちづくりは地域社会が主体となり自らの生活を創ってゆく活動を起こし、行政のサポートを受け協働することであり、「要求」ではないと考えます。何よりも先ず優先されるべきは、今ある活動を大きく育てること、暮らしの中にあるニーズを結びつける活動を促すこと、地域の社会的・人的資源を活性化し豊かにすることで、行政はそれを施策としてサポートしなければなりません。

私たちは「多文化共生の息づくまち」を創造してゆく最初のステップとして、東九条で廃校になる小学校に「多文化共生活動センター」の開設を提案しています。多文化共生の地域作りの拠点となるばかりでなく、日本社会の質的変革のための社会的寄与の一部を担うことにもなるでしょう。私たちの取り組みは東九条にあります。私たちの住む地域にある問題は京都市全体の問題に通じています。広い世界を見渡すと、従来のコミュニティが深刻な打撃を受け崩れ去り、新たなまちづくりへ挑戦した多くの成功例がありますし、それを可能にした基盤整備(国の政策)なども大いに参考になるでしょう。

「京都における多文化共生をすすめるための提言研究会」では、都市政策・まちづくり／多文化共生社会／コミュニティ福祉／社会起業などの多様な観点から、「多文化共生活動センター」の意味を整理し、京都市民に問いかけたいと考えています。

- 個人会員 1口 1,000円  
一口 1,000円で何口でも結構です
- 団体会員 1口 5,000円  
一口 5,000円で何口でも結構です

- 賛助会員 いくらでも結構です  
活動に使わせていただきます
- 特別会員 会費負担なし  
どんどん活動に参加してください

**ご協力を頂いたみなさま、引き続き会費納入にご協力ください。  
この活動は皆様の支援に支えられ行われています。**

振り込口座: ゆうちょ銀行 00910-7-216594 口座名義: キョウト・ヒガシクジヨウキャンフォーラム

## 京都・東九条 CAN フォーラム第 2 回総会開催

2010年8月1日 京都・東九条 CAN フォーラムの第2回総会が開催されました。現在、CAN フォーラムの会費納入会員は、個人会員が84名、団体会員が4団体です。2009年5月～2010年4月までの定例会議における話し合いと学習会での意見を集約し、「多文化共生のまちづくり」に向けて、2010年度に京都・東九条 CAN フォーラムが行う活動方針を次のように採択しました。

### ■基本目標に据える活動

1. 「多文化共生のまちづくり」のために、「(仮称)多文化共生活動センターを進める会」の運動を提唱し、世論を盛り上げる活動を行う。

- ① 多文化共生をおこなう活動団体の把握に努め、可能な限り多くの団体との連絡・連携が取れるよう事務局機能を強化する
- ② 多文化共生をおこなう活動グループとの連携を強化し、各グループの持つ課題と要望を調査・研究活動を通じて意見集約する作業を行う。
- ③ 定住外国人の当事者団体の育成・支援をめざす
- ④ 「(仮称)多文化共生活動センター」設立のための具体的方策を探る各種専門家による研究会を開催する。
- ⑤ 2012年(平成24年)に向けて「(東九条の)多文化共生を進めるための提言」をまとめる。

2. 「多文化共生を考える公開研究会」を開催する

「多文化共生のまちづくり」の議論を活発化し、内容を豊かにするために、「政府方針・自治体の取組み」「NGOとの協働・地域での取組み」「教育・生活支援活動」「自立支援活動」等、全国的に視野を広げてモデルとなる活動を学ぶ研修会(公開型研究会)を開催する。

3. 多文化共生をめざす他の団体などとの協働

- ① 「外国人高齢者・障がい者生活支援に関する調査」活動に参加し、京都市外国人福祉委員制度の確立と生活支援ネットワークの構築のための運動と協働する
- ② 他の団体と協働し、民族差別・排外主義への対応を図る
- ③ 行政・大学関係との協働の可能性を探る



シンポジウムは多文化共生の高齢者福祉施設「故郷の家・京都」の協賛をいただき、高齢者施設の文化ホールで開催されました



朴 実  
京都・東九条 CAN フォーラム代表



シンポジウムのコーディネーター  
原尻英樹 立命館大学教授



### シンポジウム「京都の多文化共生を進めるために」報告

2010年8月1日、東九条CANフォーラム総会にあわせてシンポジウム「京都の多文化共生を進めるために」を開催しました。コーディネーターはCANフォーラムの会員でもある立命館大学産業社会部の原尻英樹さん、パネラーには稲葉佳子さん(かながわ外国人すまいサポートセンター)、金宣吉さん(NPO 法人神戸定住外国人支援センター)をお招きしました。当日は会員も含め約100人が来場しました。



### 多文化共生ではなく多文化強制？～稲葉佳子さん

まず、都市プランナーとして東京都新宿区大久保で研究している稲葉佳子さんから否応もなしに多文化共生が進む大久保におけるまちづくりについてお話いただきました。新宿区には31万人の住民が暮らしており、うち11%が外国籍住民で、その中でも大久保1丁目は外国人比率が46.8%にもなるとのことでした。新大久保は1980年代に歌舞伎町のベッドタウンとして発展。歌舞伎町で仕事をする外国人ホステス・留学生・修学生が増加したため、日本語学校が13校もでき、安い家賃・学校・バイト先と条件が揃っていたため増加傾向に拍車をかけました。バブルがはじけたあとも外国人は増えてゆき、同胞のための食材・料理のお店ができてゆきます。更に増えてくると本屋とかリサイクルショップなどの生活関連業種に広がってゆきました。外国人住民も生活の利便性を求めるビジネスマン家族やこでの商売目的での人が増えてきます。

その子どもたちが公立学校に通うようになると学校も変化が起きてきます。現在、大久保小学校では、国際結婚も含めると6割以上が外国系の子どもたちです。地域の児童館のプログラムではいろんな国の料理を作り、皆で食べるのが当たり前の光景になっています。1990年代バブルの崩壊後、新宿にはマンションやテナントビルの空き室がたくさんありましたが、空き室を埋めてくれたのが外国人たちでした。不動産屋の9割が外国人お断りだったのが、9割が外国人歓迎に変わってきました。ここまで増えると日本人が外国人市場に参入してきます。不動産屋さんや行政書士事務所、クリニックなどは多言語に対応するところが多くなりました。この地域経済は外国人なしでは成立しないところまで来ています。ところが、理想的な多文化共生とはなっていないのが実情で、小学校のPTAとかお店をしている人は外国人との関係はあるが、一人暮らしのお年寄りなど全く接点のない人もおり、外国人が多いことを悩ましく思っている人もいます。しかし、もう誰も元には戻れないし、これからも共に生きてゆかねばならないことを知っている。そういう意味では「多文化強制」なのかもしれない。

韓流ブームの起こった頃、大久保商店街の店主の高齢化が進み後継者も無く、お店を閉じる時期と重なっていました。それがどんどん韓国のお店に変わってゆくという状況になってゆきます。大久保地域の方の気持ちは元の姿が変わってしまうことに「それなりのよさは認めるものの、新たに生じてくる問題にため息をつけばかりである」という感じだそうです。一方、外国人側では、この地域は入れ替わりが激しく過当競争で弱肉強食の世界なので、とても周りのことを考える余裕はないという状況があります。

2009年大久保に多文化共生を考える「共住懇？」というグループが生まれました。そこでの学習会で、日本人店主が「もともとあったお店が閉めざるをえなくなった後に韓国の店が入ることは、地域住民にとってはおぞましいことだ、あなたたちはそれでいいと思うのか」と若手の韓国人店主に質問したところ、「そうじゃない、子どもたちが親の姿を見て将来を悲観し、後継者がいないからと店を閉じることは望んでいない、それでは外国人だけの街になってしまう。日本人ももっと頑張りたい。この街で外国人も日本人も共に生きてゆけることを考える時期に来ている」と意見をいいました。「共住懇」では外国人にも活動を積極的に呼びかけており、外国人の参加者も増えています。

この20年間で日本人も変わってきました。「郷に入れば郷に従え」という考え方から、「守るべきルールや法律を守れば、譲れるところは譲れるよ」という寛容さや柔軟さを持っています。いろんな人がいることがこの街の資源であるという人もいます。変わることを怖れない街が大久保だといえますと話を締めくりました。

### 出会いを育む～金宣吉さん

金宣吉さんのお話はまず、「多文化共生というのは、よくわからない言葉。多くの文化が共に生きるというけど、普通の日本人は文化の違いを軽く考えている。」と安易な多文化共生論？への牽制からはじまりました。「少数者の世界と多数者の世界は違う。(P4に続く)→



外国人が多いことを悩ましく思っている人もいます。しかし、もう誰も元には戻れないし、これからも共に生きてゆかねばならないことを知っている。そういう意味では「多文化強制」なのかもしれない。

この20年間で日本人も変わってきました。「郷に入れば郷に従え」という考え方から、「守るべきルールや法律を守れば、譲れるところは譲れるよ」という寛容さや柔軟さを持っています。いろんな人がいることがこの街の資源であるという人もいます



普通の日本人は文化の違いを軽く考えている。多文化共生とは「お互いに迷惑とすることなく生活できること」



## 事務局からのお知らせ

### ● 研究会参加者の公募

「京都における多文化共生をすすめるための提言」  
 「(仮称)多文化共生活動センター」設立のための具体的方策を探る研究会を開催したいと計画しています。研究会での成果は2012年(平成24年)に向けて「(東九条の)多文化共生を進めるための提言」としてまとめ、京都府・市をはじめ関係機関・NGO等に配布し、議論が活発化し深まり、具体的な施策を生み出すためのスプリングボードを作ろうということです。

### ● 応募の要領

- 研究会は2011年3月に開始する予定ですので、参加希望者は、2011年2月末までに自由形式で「自分が研究会でしたいこと」を書いてCANフォーラム事務局に郵送またはEメールで提出してください。氏名と連絡先を必ず記入してください。3月15日までに参加の可否をお知らせします。
- 研究会活動は基本的にはボランティアな社会活動ですが、若干の必要経費を支給します。支給金額は2月末時点で、応募者にお知らせします。

### マダンセンター地図

東九条マダン実行委員会事務局・東九条CANフォーラムの連絡先があります。

#### アクセス

市バス: 202・207・208番系統「九条河原町」停留所下車、徒歩3分  
 地下鉄: 九条駅下車徒歩12分  
 京阪電車: 東福寺駅下車、徒歩5分



### 京都・東九条 CAN フォーラム

〒601-8013 京都市南区東九条南河原町3

075-204-7900

<http://higashikujoforum.jimdo.com/>

E-mail: [higashikujoforum@gmail.com](mailto:higashikujoforum@gmail.com)

→ (P3 の続き)

私が暮らしていた荊藻6丁目には30軒ぐらい住んでいたほとんど朝鮮人。子どもの頃、日本には朝鮮人しか住んでいないと思っていた。」と地元の長田区の生まれ育ちからの実感にもとづいて在日コリアンが築いてきた世界、またこれまで受けてきた差別の構造、そして日本の国際化政策は欧米からのきた「見える外国人」中心であり、本当は数の多いアジア系の「見えない外国人」の問題をどう見えるようにしていくのかについて問題提起をされました。多文化共生とは「お互いに迷惑と思うことなく生活できること」(外国人の多い公営住宅に暮らす住民の言葉)であり、縁のあった人たちと小さな場であったとしても社会をつくっていく営みが多文化共生のまちづくりであり、「出合いを育むことしかない」という言葉で報告を締めくくられました。

### 東九条に多文化共生活動センターを～金周萬さん

最後は東九条CANフォーラムの事務局長である金周萬さんからCANフォーラムのこれまでの、そしてこれからの取り組みについて紹介いただきました。

まず、人口流出、そして高齢化が進む東九条の地域の歴史と現状について報告いただいた後、東九条における様々なコミュニティ活動について、紹介されました。なかでも九条オモニハッキョ(1978年～2003年)、オモニハッキョケナリ(2003年～)、ハンマダン結成(1986年～)、東九条マダン実行委員会(1993年～)、京都コリアン生活センターエルファ(2001年～)、京都外国人高齢者・障害者生活支援ネットワーク「モア」(2006年～)「故郷の家・京都」(2009年～)など改めて東九条において様々なエスニックな取り組みが立ち上がっていること、京都・東九条CANフォーラムがこれらの流れを受けながら結成されたこと確認しました。そして、これまで取り組んだまちづくりワークショップや今年の活動の議論のなかから、「多文化共生活動センター」を提案、これは『京都市国際化推進プラン』で目指されている「多文化が息づくまち」を現実のものとするものであり、今後、東九条CANフォーラムとしてセンターの実現化において取り組んでいくことを紹介しました。

ひとつひとつの報告がそれぞれの外国籍住民の集住地において積み上げられた活動にもとづいてのものであり、120分という時間にははいりきらず予定時間を大幅に超えてしまいましたが、大変充実したシンポジウムとなりました。